

しんぱんうたざいもん

## 新版歌祭文

### 〔解説〕

安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半二（一七二八〜一七八六）です。お染久松の心中を扱った「袂の白しぼり」（一七二一）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

### 〔野崎村の段 あらすじ〕

油屋の丁稚久松は、集金した金を贋金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されています。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。

心中をも覚悟する二人に久作は意見して、別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとしています。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が手代の小助に渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

## 野崎村の段

引き立て、入りにける。

後に娘は、気もいそぐ、

「日頃の願ひが叶ふたも、天神様や観音様、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結ぶて置かふもの。鉄漿かねの付け様挨拶もどふ言ふてよかるやら」

おぼつかなますこしら

覚束鱈拵へも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と気も

勇み、手元も軽ふちよきくく、切つても、切れぬ

恋衣や、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、

あとを慕うて野崎村堤伝ひにやうやうと、梅を目当

てに軒のつま。

「物もふお頼みもうしませふ」

といふもこはこは暖簾越し、

「百姓のうちへ改まつた。用があるなら這入らしやんせ」

「ハイく卒爾ながら久作様はうち方でござんすかえ。さやうなら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ」

といふ詞つき姿かたち。

「常々聞いた油屋のさてはお染」

と愷気の初物、胸はもやもやかき交ぜ鱈俎まないた押しや

り、戸口に立寄り見れば見るほど、

「美しい。あた可愛らしいその顔で、久松様に逢は

してくれ。フンそんなお方はこちや知らぬ。よそを

尋ねて見やしやんせ、阿呆らしい」

と腹立ち声。心付かねば、

「ホンニマア、なんぞ土産と思つても急な事、コレ

く女子衆、さもしけれどもこれなりと」

と夢にもそれと白玉か露を袱紗に包のまま、差出せば、

「こりやなんぢやえ。大所の御寮人様、様々々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女と悔つてか、欲しくばお前にやるわいな」

とやら腹立ちに門口へほればほどけてばらばらと、草にも露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した。中へつかつか親子連、出てくる久作。

「アどうぢや〜鱈は出来たであらう。さて祝言のこと婆が聞いてきつい悦びぢや。が年は寄るまいもの。さつきのやつさもつさで、取りのぼしたか頭痛もする。ア、いかう肩がつかへて来た。橙の数は争はれぬものぢやわいの」

「さやうならそろそろ私が揉んで上げませうか」

「ソリヤ久松忝い。老いては子に随へぢや。孝行に

かたみ恨みのないやうに、コレおみつよ三里をすゑてくれ」

「アイ〜、そんなら風の来ぬやうに」  
となにがな表へ当り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ。

「サア〜親子とて遠慮はない。もぐさも<sup>けんべき</sup>疮瘡も大掴みにやつてくれ」

「アイ〜コリヤマアきつうつかへてござりますぞえ」

「さうであらう〜。ついでに七九もやつてたも。オツトこたへるぞ〜」

「サア父様すゑますぞえ」

「アツアツアアア、アアえらいぞ〜。ハ、イヤモウあすが日死なうと火葬は止めにして貰ひませう。

丈夫に見えても古家。屋根も根太もこりや一時に割

普請ぢや。アツくくく」

「ヲ、父様の仰山な。皮切はしまゐでござんす。ホンニ風が当たると思や、誰ぢや表を開けたさうな。締めて参じよ」

と立つを、引止め、

「ハテよいわいの。昼中にうつとしい。ノウ久松、久松、久松、コリヤ久松。よそ見してゐずと、しかくと揉まぬかいの」

「サアよそ見はせぬけれど、覗くが悪い。折が悪い、悪いく」

と目顔の仕かた。

「ヤ悪いの覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、どこもおみつは覗きはせぬがな」

「サアアノ悪いと言ひましたは、確か今日は瘰癧うんこう日。それに灸は悪いく」というたのでござります」

「エ、愚痴なことを。このやうに達者なは、ちよくく」と灸をすゑ作りをする、そこで久作。アツくやつぱり熱いわいハハハ。なんぢやわい、わが身達も達者なやうに、灸でもすゑるのがおいらへの孝行ぢやぞや」

「ヲ、さうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり呼出したり、エ、憎てらしい、あの病ひづらが這入らぬやうに、敷居の上へ大きくしてすゑて置きたいわいな」

「アツイくおみつ、なんするぞいく。そこは頭ぢやがなく、頭に三里があるかいやい。アアトツトモウ、えらい目に合はすがなハハハ」

「コレおみつ殿。振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」

「ホハ、変つた事がお気に障つた」

「フ、障らいぢや」

「コリヤをかしい。その訳聞くぞえ」

「フ、いふぞや」

と我を忘れていさかいを、外に聞く身の気の毒さ、振りの肌着に玉の汗。久作ももてあつかひ、

「コリヤヤイ、コリヤ肩も足もびり／＼するがな、

びり／＼。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの

取越しかい。灸行やいとぎょうの代り喧嘩の行司さすのかやい。

二人ながら嗜め／＼」

「イエ／＼構ふて下さんすな。今のやうな愛想づかしも、病づらめが言はしくさるのぢやわいなア」

「なにをいふやらハ、ハ、モウ／＼両方ともおれが貰ひぢや。ヨ、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鉄漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御を、コリヤ作つて置け」

と打笑ひ無理に納戸へ連れて行く。その間おそしと

駈入るお染。

「逢ひたかつた」

と久松にすがりつけば、

「ア、コレ声が高ふござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」

と問はれてやう／＼顔を上げ、

「訳はそつちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの文。そなたは思ひ切る気でも、私やなんほでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懐しさ。勿体ない事ながら、観音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞へぬ

わいの胴欲」

と恨みのたけを夕禪の、振りの袂に北時雨、晴間は  
さらになかりけり。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。